

教頭の小部屋

2021.5.24 週の4



君子はその位に素して行い、其の外は願わず

カレーハウス CoCo 壱番屋の創業者、宗次徳二さんが創刊された「プチ紳士からの手紙」という月刊の小冊子があります。以前、その冊子を読んだことがあり、このコロナ禍にある状況に、ピッタリな話があったことを思い出しました。当時、兵庫県の中学校の教頭先生が書かれた手紙だそうです。(内容を要約しています。)

中学校に入学した男の子。箱根駅伝を走った父親の影響もあり、「将来は自分も箱根を走るんだ。」と意気揚々と陸上部に入部したのはいいものの、蓋を開けると男子部員は自分一人だけ。それでも女子に混ざって黙々と走り続けていた彼に、監督が与えた役割は「女子の引っ張り（ペースメーカー）」でした。女子部員の中に、よい素質を持ちながらも自分のペースが作れず、苦勞している小柄な選手がいました。この選手の力が伸び、安定して本来の力を発揮できるようになることが、チームのレベルアップにつながると考えた監督が、彼に白羽の矢を立てたのです。野球でいえばバッティングピッチャーです。「こんなことをするために陸上部に入ったのではない。」と思ったとしても不思議ではありませんが、彼は「ハイ」と返事をし、夏休みから女子のペースメーカーとして走り続けます。「自分自身もペースを保ちながら走る良い練習になる。自分自身の力をつけることになる。」と信じて、暑い日も雨の日も、黙々と走り続けました。彼は後ろから女子にみられていると思いフォームを意識するようになりました。すると彼の自己ベストも次第に上がっていったそうです。また彼のおかげで、女子の選手たちも、ペースを崩さず走れるようになり、どんどんスピードがついていったそうです。

駅伝大会の前に、監督は野球部から助っ人を6人借りて急遽駅伝チームを編成して大会に出場させることにしました。念願の駅伝大会に出場した彼は、一区の10kmを任せられ、終始先頭集団に食らいつき、強豪の選手に引けを取らない力走で、自己ベスト記録の区間4位で襷を繋いだそうです。

女子のチームは、一区でトップに立ったものの、二区でライバル校の選手に抜かれ、40秒のタイム差をつけられました。それでも3区以降の選手が40秒の差をじわじわと追い詰め、最終走者の折り返し地点で、先頭の選手をとらえます。どんどん追いついてくる2位の選手に焦ったライバル校の選手はペースを乱し、まさかの逆転優勝で全国大会の出場が決定しました。

彼は女子の優勝を見届けた後、一緒に走った野球部のみんなに礼を言い、その後、女子の使っていたテントをたたみ、荷物を1人で先生の車に運んでいました。彼がいないのに気づいた女子選手たちが彼を探し、照れて遠慮する彼を真ん中に入れて写真を撮ったそうです。

自分の置かれた立場や環境に嘆かず腐らず、必ず自分の力になると信じて、今できることを精一杯頑張る。この彼は見事自分の力を伸ばすだけでなく、仲間からの感謝や、強い信頼をも得ることができました。

コロナの影響で制約の多い生活を強いられている私たちも嘆かず腐らず、今自分でできる BEST を尽くすしかありません。近い将来必ず自分の力になると信じて。



